

屋久島の自然環境とトイレ問題

堀内直哉（屋久島ユネスコ協会）

1. はじめに

屋久島は世界遺産に登録されてから11年が経過し、登録以前に比べると様々な変化が各所で見られるようになった。観光客の増加や各種建設・工事の拡大、屎尿・ゴミ処理の負担増がそれにあたる。経済的な効果にのみ視点をあわせると、観光客の増加は好ましい事ではあるが、自然環境や住民の生活における持続可能性や負担の軽減に繋げて考えると、これは楽観視できないと思われる。屋久島の自然に触れ合う事で多くの人々が自然の大切さや尊さを感じ、将来にわたって身近な自然環境から持続させていく意識向上につながる事は極めて重要であり、意義のある事である。しかし、触れ合うという行為自体が持続可能でなければならない課題を抱えているのも事実である。

ここで言う持続可能性とは、基本的な自然システムの維持・遺伝子資源の保護・環境の持続的利用という3つに大きくまとめられるが、その先には未来の世代がその必要に応じた用いる可能性を損なわないという基本概念に繋がっている。その観点から考えると、今の屋久島の現状はあまり好ましい状況ではないと推測される。なぜなら、観光客の受け入れを企画する側がその地域の自然に持続可能ではない大きな変化を生み出そうとしているからである。

それは、多くの人々が集中的に入ることで屋久島の薄い表土に分解処理能力の限界を超えた屎尿を与え、これまで登山道が見当たらなかった場所に道を作り、また遺伝子資源の減少に繋がるような影響を与える行為の拡大に結びついている。単純に分散させれば解決の道に繋がると考える意見もあるが、屎尿など限界を超えた利用などに関して持続可能なシステムが出来上がっていなければ根本的な解決には繋がらない。これら屋久島の諸問題は、ほとんど観光に結びついていると考えて相違ない。

このような観光に付随する問題に対し、行政を中心とした対策がなされてはいるが、自然環境の保護・保全に関しては、草の根的な活動が重要であり、地域住民の意識と行動そして訪れる人々への緊密な働きかけが根本的な重要性を持つと考えられる。

しかしながら、現在の屋久島では一部の大資本に偏った悪循環の構造が出来上がっており、十分な住民の参画はなしえていないのが現状と推測される。

その屋久島の実状は観光の質の低下や観光客の増加に伴った屎尿・ゴミ量が増大し、それに伴う処理システムの拡大やそれに費やされるコスト・仕事量など住民の負担が拡大し、それを補完するために経済優先での活動に拍車がかかるという悪循環を招いており、日々の住民生活の意識が環境保護・保全中心に移行しにくい現実が存在しているという事である。

このような悪循環を断ち切るためには、屋久島に住む人々が一体となって問題改善への道を探る必要があり、環境世界は繋がっているという認識の下に島外の人々との問題の共有化を図る必要がある。また、他の地域の環境問題に対して理解を示し改善へ向けての相互助力の体制を築くことが、私達の生活を守る上で非常に有利であり、地球的規模での環境向上に向けての底上げに繋がるのである。

2. トイレ問題の現状

屋久島のトイレ問題に関しては、緊急を要するという認識が官民共に見られるが、その実態は、残念ながら立ち遅れていると言わざるを得ない。なぜなら、屋久島でのトイレ問題に関しては世界遺産登録後の平成6年から議論され続けているにも関わらず、ほとんど進展が見られない現状にあるからである。11年経った最近では、この逼迫した状況から鑑みて有識者などによる議論が再燃しつつあるが、これまでの11年間で議論されるために費やされた費用・時間を考えると、問題改善のための循環型トイレが何基設置可能だったか非常に興味が湧く。

観光客の集中的利用による影響が懸念されている縄文杉への登山道に関しても、平成15年4月に国と県とが折半し、設置導入された循環式のトイレが標高910メートル地点に総工費1億2千万円かけて建設された。(5キロふもと寄りの発電所との間を結ぶ送電線敷き工事に5千5百万円投入) この動きによって屋久島のトイレ問題解決へ向けて、更なる前進が期待されたが、このトイレの維持コスト(電気料支払負担や尿尿搬送費)やメンテナンスの点から考えると合理的とは言えない状況が現在も続いており、加速的な前進は望めなくなった。また、さらに問題なのはこの標高より上部の世界遺産エリアでの尿尿処理問題がほとんど改善されていない実態を露呈させた事である。このような現状から、残念ながら住民や登山者における更なる負担増は避ける事が出来なくなった。

現在、山のトイレ問題に関しては屋久島山岳部利用対策協議会で議論されており、屋久島山岳部における環境保全協力金の導入検討(緊急的措置としての携帯トイレ導入や遭難救助費用を含む)など前進的な議論がされてはいるが、具体的な動きまではもうしばらくの時間がかかると推測される。

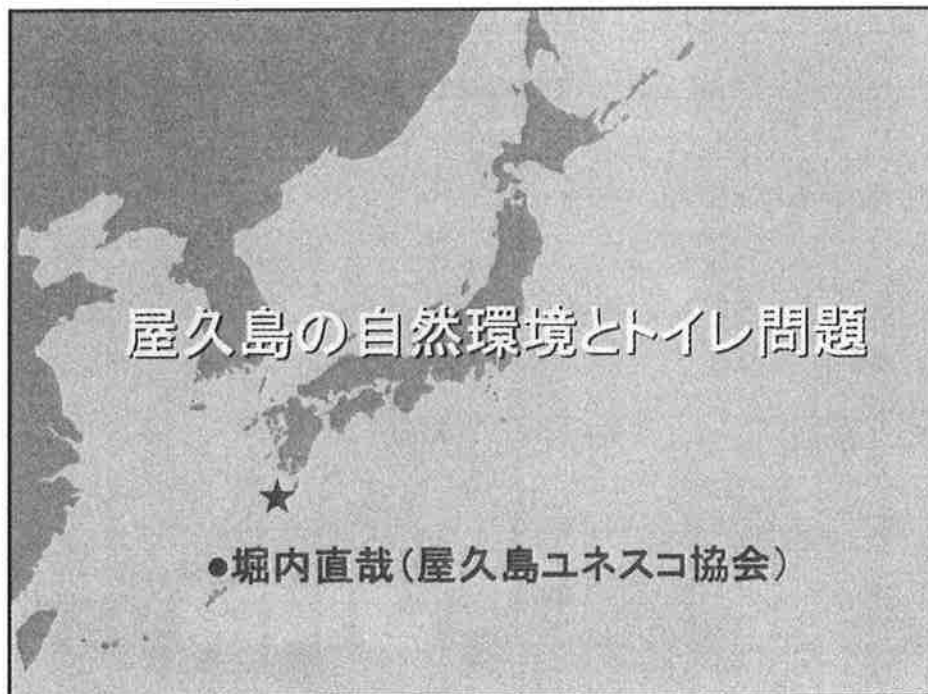
このような進展状況を改善し、積極的且つ合理的な行動に移行させるためには、地道な住民活動と島内外の多くの賛同を得る事が必要不可欠だと考える。

3. これから向かうべき方向

これまでの現状を踏まえ、更なる問題改善に向かわせるために必要な事は、持続可能な利用調整を住民主体の活動から行うという事である。何も屋久島だけに当てはまる事ではないが、屋久島での動きから考えると自然の利用を無制限ではさせないための検討を行う事であり、屋久島以外の地域(世界遺産に関連する地域を核とする)とのネットワーク作りや総合的な環境教育のシステム作りを柱とした活動を行うなど、様々な企画立案を出来る限り多くの住民と議論し、問題点を見つけ出し、解決策へ向けて地道ながらも一步一步行動を始めるという事である。こうした行動が実を結ぶことによって、国内外のあらゆる地域、世界に繋がるのである。また、環境を破壊しながら経済成長を続ける事は出来ず、地域住民が環境を地道に守っていく事で持続的な恩恵を自然から預かる事が出来ると考えている。

したがって「観光」のみで成り立つに非ず。常に「環境」を重んじてこれからの町づくりに取り組む必要がある。

すなわち、ただの「観光地」ではなく、真の「環境地」を目指す。



はじめに

- 今、私達の周りでは過去から様々な問題が密接に絡み合い、地球規模での環境危機が拡大しつつあります。これまで各地域ではその解決に向け、多くの有識者・一般住民などによる議論がなされてきました。人口増加による食料・水問題など、社会・経済と密接に関係する環境問題を各地域間で共有し、理解をすることが大切です。また問題解決へ向けては、グローバルな視野での考えが求められており、環境世界はつながっているという認識が大切です。中でも重要なのは、足元から行動することです。地域間での連携したアクションが様々な問題解決への近道であるとされています。

屋久島図

Yakushima Tour

屋久島ツアー



屋久島の山々



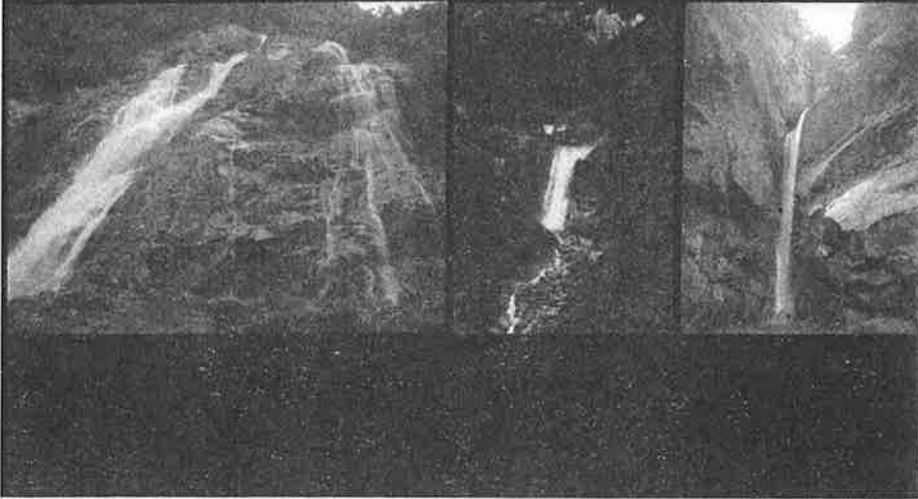
屋久島の巨木



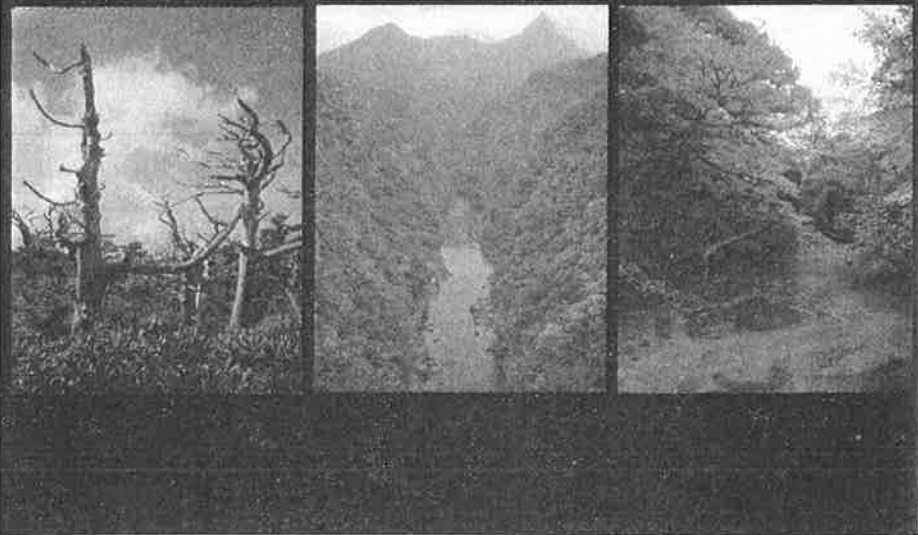
屋久島の沢



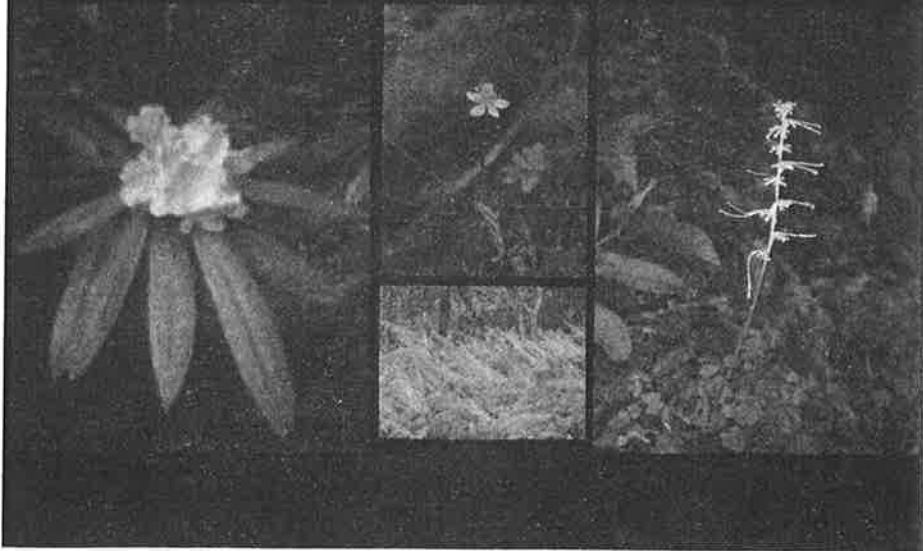
屋久島の滝



屋久島の森



屋久島の植物



屋久島の冬



屋久島の生物



屋久島山岳利用の現状

◆年間入島者数(万人)

H12	H13	H14	H15
26 (16)	28 (17)	29 (17)	32 (19)

(カウンターによる集計データ)

- 月別では、5・8・11月に集中
- 縄文杉利用は約4万人
- GW中のH7とH15の比較では、縄文杉利用は約2倍

◆年間登山者数(万人)

H12	H13	H14	H15
4.5	5.7	5.1	5.4

ところが...

実際は縄文杉利用のみで約6万人の利用現状が浮上！(アンケート調査)

自然ダメージ調査



(写真上)人の身長ぐらい浸食された登山道

(写真左)大雨が降ると川のような登山道

屋久島におけるダメージの現状



(写真左上)ダメージを減らすための木道階段。「防腐処理をしてある」

(写真左)生きた木の根にカスガイを打ち込み足場を作っている。

(写真上右)侵食で歩きにくくなった本来の道避け、新しい道が出来てしまった。

屋久島におけるダメージの現状



(写真上)人の足による影響。植物の根が地表に露出している。



(写真上) 苔を持ち帰られたポイント



(写真上) 屋久杉を切り取られたポイント

屋久島での環境活動



(写真上)ごみが山の中に埋められている。

(写真左上・左)定期的な環境活動「ユネスコ協会主催」

屋久島のトイレ利用の実態

主な屋久島山岳トイレ数 (標高約600m以上)	
遺産エリア内	遺産エリア外
4	6



2004年8月13,14日調査
今回の登山日程(227名)

- 2泊以上
- 1泊2日
- 日帰り

避難小屋利用状況調査日における登山者数		
日付	大株歩道入口	淀川登山口
	入・下山合計	入・下山合計
2004.8.15	633	74
2004.9.11	586	204

第1回屋久島山岳
地域利用適正化
推進検討会配布
資料より

屋久島のトイレ事情(その1)



(写真左上)建物の外観

(写真左)小用が2基・大用が1
基設置されている。女性用は
2基の設置

(写真上)オーバーユースの
現状

屋久島のトイレ事情(その2)



(写真左上)大株歩道のトイレ

(写真左)オーバークースの現状

(写真上)小用が3基・大用が1基設置されている。女性用は3基の設置

これから向かうべき方向

- ・ 様々な住民との議論から問題点を見つけ出し、解決策へ向けて地道ながらも一歩一歩行動を始める。こうした行動が実を結ぶことによって、国内外のあらゆる地域、そして世界へと繋がる。また、環境を破壊しながら経済成長を続けることは出来ず、地域住民が環境を地道に守っていくことで持続的な恩恵を自然から預かることはできる。したがって「観光」のみで成り立つに非ず。常に「環境」を重んじてこれからの町づくりに取り組む必要がある。

すなわち、ただの「観光地」ではなく、真の「環境地」を目指す。